

出頭請
は向ふ
上由
親平
に動力
三百七
にして

以て召集する可き臨時議會に提出する事に決定せり（東京電報）

半は一時市價不定を告げし原料

社の資本金を九百萬圓にする乃ち
百萬圓の増資も豫定の如く決行し

有り輸入は各枯れ季節とて殆どはれず輸移出又新規の注文無

於ける林野史蹟調査のため總督
林課海老原技手一行四名は十三

▲岡本憲三郎氏(開城署長) 十六日夜
▲神野孝夫氏(成興齋兵隊副官) 十六日
清光館へ

京

第六十一席

られる。時に、末座に控へて居りし
 した小澤七郎右衛門是を聞いて、進
 出で七恐れながら七郎右衛門申
 上げます、其の鞘子と申する處
 往古より殺生禁斷の場所にして此
 へ足を入れたる者もなく、別して此
 の地は淺間大神の御御所にして便
 命と申す狼が棲み居るのを承
 類に近き獸物此の山を特立ます
 神罰の程も恐しく其儀は御無用
 されて然るべくと申し上げた時
 毛皮なめし 地方代官
 スリッパ製造 大坂屋 京坂黄金町
 忠臣蔵 七郎右衛門、此の
 長は磯府に在城いたして磯邊平三

可演藝案内

天然色活劇新舞台株式會社群一手代酒店
早川直登 **黃金館**
二月十六日(三) 時常開演 大團圓
泰西大活劇の秘密
天然色活劇水戸黄門三郎九段漫遊記 全五巻八十八回
少年讀本水戸黄門三郎九段漫遊記 全五巻八十八回
大阪毎日新聞週刊小説 菊池寛氏作
家庭園地 母と子、過つての秘寶、再び紅翠娘、弟入道のお母の危殆、風車屋、三木彬子、最後は、加納の夜、山吹の夢、田民の
主演 吉原良子、藤島田端、おげん村田正三、紫紅國太郎、千代田花子、吉野の弟子、常盤、山田高北川中品、櫻井武夫、山崎山、山田高北、赤穴清水、土手寺の禪心、鎌倉者、山田重太郎、今岡十郎、持田芳太郎、海津江利雄等
今日開始 午後五時五分より七時三十分 三時三十分 七時三十分 九時三十分

[illegible][illegible]

**專眼
門科**
意隨院入

江頭眼科醫院
祭日午後二時迄 江頭富雄

大塚醸造所吟製
 前田酒店
 電話一三七番
 東京口至四三三番
 發賣元
 京坂本町二丁目
 攝津灘

男の生殖器病

[illegible]

肺結核新藥

フアコーレル

東京醫科大學教授
醫學博士 高橋順太郎氏 監製

フアコーレルは最大の効果ある結核治療として世界の公
認を得たもの也。

諸君へ大衆歡迎集積料返呈△定價六拾五圓入金郵四拾
五圓△郵購百拾入金郵四十六圓△其他大坂數賣あり
△全日本著名藥舖に販賣す△無き時は直接郵便注文を乞ふ可

一手販賣元

東京日本橋區本町四丁目

友田合資會社

總店東京一九三八年二月發行

大阪 店約特西國
經兵長岡的

●直段一大引下ゆと取引法改善謹告

各位益々御情福奉賀候弊店儀永年各位の御骨願御引立を蒙り御蔭を以て益々隆盛に趣き候段奉深謝候 随つて平素各御得意様の御厚意に酬ひん爲め今般店則の一大改革を施し且つ諸品一般產地直段益々暴騰一方に不係弊店は正反對に一大引下げを斷行し誠心誠意薄利多賣主義の本分を以て大勉強可仕候間多少に不係續々御買上の程奉懇願候

漆器 什物 磁器 文具紙 茶穀 酒物 雜貨 産物 銘産物 浮磁器 石陶磁器 金銘産物 石油

仁川宮町 電話七六二番 坂登京城三八九番 津田兄弟屋本店 津田兄弟屋陶器部 津田兄弟屋支店 京坂本町

寫眞銅版、亞鉛凸版
寫眞撮影、コロタイプ（刷印）
京城日報社
東京太平町
電話六六〇番
（横内電話
十二番）
寫眞製版部

白粉中の白粉、塗けて
 普通の白しろいとは
 白とちがひ
 異ふ
 ホーカ
 白粉

肌生地の美しさに、遠く外にない美容師、本位の白粉一度お試し下さい。
 定価一匁五錢
 送料内地無料本舗 東京和泉橋（銀座東一五）
 堀越太郎商店

お顔お かのほの荒止め
お顔お かのほの艶出し
お顔お かのほの脂取り

奏効最も
確實ある

三三三乳液

クラブ洗粉
ほんてんしんはつめい
本店新發明



日八十月二
(夏八て世合と刊タ)

泰しんと解へたる
 春にたる我らには
 明の心は遠く
 四百里州へ解し
 生拙なり此時と
 昨は交際をば
 成成の水は前やらず
 雲は空を空なりき
 花の枝は枝なりき
 北風ゆるは遠く
 山のかの遠く

心の中を解しき
 いかで挽く一風に
 日本武士の心なき
 馬も或しと李如松を
 手ぐすくし男侍たり
 亦男侍たり
 風に隨ふ風情の
 昨夜の仙の顔が
 昨夜の仙の顔が
 山のかの遠く

釋宗演

修養ではない。要するに神は人間活
 動の原力即ち生命の幹線長養するに
 あるのである。之れを具體的に感ひ
 て云へば、腹の養成、心力の養成で
 ある、心力と云つては眞義かも知れ
 るで、之を今少し局言すれば、六波
 羅宮中の精進刀、換言すれば勇猛進
 する力を養成するのである。

五

力には又その根柢となるものである。
 神の御せに、小兒は泣を以て力とす
 る。泣く兒と地頭には勝つてゐるが
 らいよであるが、兒の泣く力も能く
 考へる性質にある。婦人は怒る
 を以て力とする。成程半生は妻達の
 やうに泣いても理屈でならぬと怒る
 怒りては泣く、恨も、恨の千重萬重
 を叱咤した勇將、羽も庶民人に泣か
 ぬ。

主刀は神有縁以ての泣く附近に、
 櫻は水色附近に離離せしもの、
 紅は紅は最後先づの衝突に始まり
 たる、兩羽相闘ること一里、我輩
 は鶴きに據りて之を望見し、常半午
 十時より鶴が十二時に到りて、勝勢
 の決つて見る。或は敗者を収めて成敗
 に出る、遂に代價に

大なる勇猛心をもつて、武士道のの本
 傾は實に其勇猛心の發現にあるので
 ある。然し一途に勇猛心といふても
 足らず人の蠻勇ではない。智と仁と
 を包摂した勇猛心でなければならな
 ぬ。此武士的の精神に最も能く契合し
 たのが禪の宗旨である。禪宗が渡來
 してから、漸に鎌倉時代に於いて、世
 間の修養士に依つて心力を練り、
 武人の多かつた事は誰も知れる。

だといふ。女と小兒は養ひ難しと
 か、少々醜い意口ではあるが、さう
 したものと見ゆる。其精神は揚げて
 いて津門の境を以て力とする。渡
 り門とは階層のことである。此里の
 坊さん仲間で金太安太はこはいは
 れぬ。チロイ／＼面白くない。暗黒
 にするが、兎に成も洗門の洗門を力
 にする。國王は兵威、月、力、
 之は申すまでもない。蜀漢は精通
 して、蜀漢の北邊より指點する。

待も同年五月まで京橋に駐屯せり。
 記人の京町路に此戰を讀み
 たり。婦人の怨を成に他所棄
 の怨を成するの意を成を記さず
 の怨を成するの意を成を記さず

薩摩一人の功をす。其薩摩に合はす
 薩摩の未だ。其薩摩に合はす。

家の下に軍醫川田大長、薩

願ひてゐる。此の邊に土庫の様な
 庫に、商人であれ、百姓であれ、此庫
 庫が割ひ込まれて居るのである。要
 するに釋は斯うやうな力を養成する、
 人間生活の金庫に立つて通用自在な
 る生命力を養成し、磨き立てるのであ
 る。然し如何に百萬金を列べ立てた
 處で、千萬金の禪銀を掃いた處で抽
 象的に説明したり、他人の情眼を癒
 したばかりでは、何にも光らない。自
 己に於いて這如何に實を養ひ、究て初
 坊さん風にせなければならぬといふ
 力とする。此處悲心こそ力の究極一
 あつて勇猛精進の心も此の慈悲の力
 に依つて現はれる。吾人が佛の立場
 から、心の力といふても精進力を養
 成するに於いても、要するに此大悲
 悲心を具はしつて、鈍弱な心と此大
 悲の世の中を救済して、永劫不亡の佛
 國土を建設するといふに外ならぬの
 である。力を養成するといつても、
 を俟たざるなり。余は獨り水戸縣
 日長堤掃墓の邊古傳に引據したとい
 う。高岡里は京城を距ること四里、
 の古館の建物あり、門前に磐石、
 三の大字を題す。昔年釋尊が
 に移したといふ。先づ舞、本
 各部に題せらるゝものなるべし。土民
 農耕に往々疲を獲たることは月沙化
 に見、當時の遺物なりしならん。因
 二月の末三月の朔は春はうしを

主方居門成
近來青年學生の人が能く枕の邊に來て「私は記憶力が衰へ、忍耐力が薄らいて困りますから、何うか支那語を學んで見て下さいませんか」といふ。出

思人怠慢を生んだといふ思つた。又物を運び事を辦する方が力だ位に考へるやうでは、眞に自己の面目を徹見する事は出来ぬ。先づ第一に其夢を先此の力を自覺し用ゐ得て活きた生命を現はさねばならぬ。

六

碧蹄の戰
(文祿役三百廿五年の當日)
素寒散人

余は先年高陽郡の碧蹄里に遊び小早川隆景諸將の密會した古戰場を覗ひ又従來日滿朝の史蹟に置見する隱微を精駁し之を朝鮮雜誌に寄稿せし

されば京城の子弟をして此戰跡を地に探究せしむるは國民教育の實地たるや大なり。世の亦徳根人の暗秘傳を記念とし漢花館流の酷吏教を使用するもの如きは韓人の子弟戚の甚しきなり。余の高陽郡とすの新體叙事詩は左の如し

三百年のその昔
我々萬の大東は
西と東へが
韓土州に相分し

いふが、そんな事も坐禪の副産物とし
て現はれるかも知れないが、入門の
第一に於て已に下駄違をして居る
禪の本旨といふのは決して、神祕義理
の療法ではない。脳が悪いとか、身
を豊く薄くさかなら、情慾もわり、憂
りて其二千七百なり云西晉一五九三
時の瘡痂にして職天の蕒一を爰能す
るに足らずと雖も此斷腸は今大正六
年を距ること三百二十五年明即ち
我が文祿二年癸巳陰曆正月二十八日
（當時の朝鮮陰曆には一日の相違あ
る）
百濟僧の鑑真も
其間明の禪宗は
遂に漢平漢統
に衰へて漸次
の衰へたる中
に提持する如
く不問及んで
明より都を遷し

東晉に多寶
北地四菩薩也
當其幼弟有
善為之者曰
善哉方之世
與易と梅耶
不問及んで
明より天子に軍功を

(文祿役三百廿五年の當日

を使用するものゝ如きは彼人の子で

余は先年滿洲國の碧蹄里に遊び小
川原縣縣志の發閱せし古戰場を引
て又從本日縣志の史蹟に發見する縣
を精査し之を朝鮮雜誌に寄稿せし
とあり。余の拙著なる新體朝鮮（註）當
の舊稿に、捕虜の萬一を發見す
に足らずと雖も此戰役は今大正六
を距ること三百二十五年前、即ち
文祿二年癸巳陰曆正月二十八日
當時の朝鮮陰曆には一日の相違あ
り、此二十七日なり（西曆一九九三

三百二十五年の癸巳
辛丑年に當りし
（西）一五九三年が
明の援助に依り
十日の程を以て
十日の程を以て
十日の程を以て
二萬の軍勢を率
明王に都を遷せし

我十萬の軍兵は
破虜の勢すまじと
手懸き者あらざに
北地の騎兵を集め
まがが勢の巨を
東征の方に出して
不慮なく起る來
明王天子に軍攻を

しとす新體敘事詩は左の如し

○新年雜詠
藤倉

集陰。

評曰 歲暮實況
○探梅天。阪上 怡苑
行有梅花。陽春。尋得梅花雪寺前。山
忍寒摘女字。香雪浮波飛渡邊。
評曰 奇巧可嘉
○同 田淵 奈州
風塵脫走香來。不問先知有早梅。行
臨溪流水畔。笑人招我笑顏開。

評曰 情味可掬
○夢遊仙國。西田 自陰
雲英雲長大青。羽衣高舞入雲中。隱
一枕微酣夢。聖代除殘笑俗翁。

評曰 奇想天外

日 報 歌 壇

六山名無草
心いよ静かにあれば地に落つる雪
を戯へて物思ふよれば
京城 志摩 秋木
雪降る野を開めてあれば
京城 都子 鐘
煙草衷む醜くき霜の染みでゆくわ
若き日に遠ざかりつ
京城
春暮われの持ちたる丹の頬をその
まゝ持てる少女なり君は
京城 鏡古柳子
あなかなし襟にわかれし夜の如く
つめたき風に山の松鳴る
人の思ひ餘かに胸に入る如くねば
たんの夜をふれる白雪

▲英國ビツク會社製汽鍋
ランカシヤ型直徑七呎長卅呎 一個
ランカシヤ型直徑六呎長廿呎 一個
水壓百五十封度
所在地 新義州税關濱

▲獨逸ボルマー會社製
高壓チユブボーラー徑四呎三吋
長十二呎徑二吋チユブ六十三本入り
水壓二百封度
所在地 京城當工場

▲回轉運礦車
二十立方入
持合せ一打半

所在地
京城當工場

▲スチーム・ハンマー

汽筒 九吋
ストローク 廿吋
ピストンロッド 徳四吋半

所在地 京城當工場

□ 當店は物價低廉の際輸入在庫品豊富に付鐵工一般
□ の業務を廉價御注文に應じ候間何卒御用命願上候 □

朝鮮に於ける完全近き

NAKANE
FOUNDRY
AND
IRONWORKS
TEL 104-105-236

漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機
漢口鐵機

南大門通
五丁目

中根販賣部

電話四一〇四番一〇五番

京城
岡崎町

中根工場
電話二五六番

當工場の製作各種
鐵山機械は朝鮮物
産共適合に於て
賞牌 一
褒狀 三
を授與され朝鮮鐵
工界に於る最初の
受賞者たるの光榮
を得たり

